

- もの組かへられぬ。源平を以て名所にかへ、郭公を競馬にかへ、鳥合を矢数にかへて家の十組となせり」といい、『香道滝の糸』で「寛政・正保の比……貴命をうけて米川常伯子これをあらため」という。関真卿は『香道真伝』で「米川常伯十組を改、郭公香・鳥合香をさりて矢数香・競馬香の二組を入、系図香を補ふて源氏香とし、源平香を改め名所香とし、十炷焼合を変じて連理香となし」という。
- (31) 篠山鳳鳴高校蔵『香式』。
- (32) 大枝流芳の『古十組香秘考』には「東福門院様の貴命に、大平の時源平の争忌はしきよし仰せにより、米川常伯名所香に組かへられしと云」とある。
- (33) (2)の『空華香道余談并弁要』は外題で、内題はない。同じ加賀文庫にある『香道余談』は外題が『空華庵香道談余』で、内題は『香道余談』。これにより表記を『香道余談』とした。『空華香道弁要雜記』の巻末にある、書込の『香道余談』第三条引用の頭に「惠南香道余談の中」とある。『空華香道余談并弁要』に夾まれたメモには「香会余談」とある。
- (34) 『古典の事典』へ精髓を読む―日本版⑩昭和六十一年六月河出書房新社発行。
- (35) 赤井達郎『日本を創った人びと19 尾形光琳』昭和五十四年五月平凡社発行。六頁。
- (36) 都立中央図書館加賀文庫蔵『空華香道余談并弁要』の巻末書込に引用する。岩田漱芳（大枝流芳）「香事随筆」。

うけたもつ（享保の意）といふ十とせあまりの春にや」としながら六十六歳の時としている。忍鎧六十六歳は享保二十年であり、「十とせあまり」と合致しない。また小武友梅が享保末年八十六歳で亡くなった記（『香道余談』第三十条）にも、蘭奢待の香会の記にも、その死が会後まもなくだったことは触れていない。生前の思い出に蘭奢待を是非聞きたいといっていたと記しながら、その死について言及しないのは、死が同年のことでないといえよう。

- (15) 祖父風早実種（寛永九年—宝永七年。忍鎧四十一歳の時没）は風早流といわれる香道の祖。風早実種（忍鎧より二十一歳年下）を忍鎧の和歌の師とする（『群書一覽』「自讀歌管注」に「和歌は風早実種卿の門人也」とあり『国書総目録』もこれを踏襲している。『増訂国書解題』「同前」は「和歌を好みて風早実種の門人」とあり、『名家伝記資料集成』もこれを踏襲している）が、蘭奢待香会の際の実種と忍鎧の和歌の贈答によって誤伝されたものであろうか。蘭奢待記には小武友梅が「官家に候する内風早家世々したしみふかし」とあり、実種卿と交誼があったのは小武友梅と記している。

- (16) 『詠寝覚和歌』が現存する。大阪市立大学森文庫蔵。『続近世畸人伝』には二首載せる。

- (17) 都立中央図書館本。

- (18) 藤野昌章。のち専斎。蜂谷宗先の高弟。嗣子勝次郎ついで豊光の後見役。宗先亡き後志野流の中心として活動。藤野氏の系図は国会図書館蔵香道伝書巻六にある。

- (19) 立命館大学図書館蔵本（近世風俗・地誌叢書第六巻所収）による。都中央図書館蔵加賀文庫の同じ刊記の版本には栖鶴がなく藤野専介だけになっているので、ごく近い時期に亡くなったの

であろうか。

- (20) 伝未詳。この序によれば、この時既に老年（蛙歩を進め腰屈め杖つき）、丹堂と号し、五条橋の東に住まいがあった。

- (21) 東京大学蔵の『香聞様』と外題のあるものがその写本。本文は「暗部山題辞」から始まる。これは連理香までで付図がない一冊本である。

- (22) 早稲田大学蔵『志野流香道伝書』（上野宗吟編享保一五年序。文政六年写本）に「後追加書入」として「暗部山題辞」が収録されている。

- (23) もっとも手直しがあるのは凡例部分。

- (24) 忍鎧より二歳年長の黄檗宗の僧。近衛家熙の帰依を受け、この前年より岡崎の別邸に寓居していた。詩歌茶画などもよくした。小武友梅の蘭奢待香会に掛けた忍鎧の寿老人画に賛をした一人。

- (25) 享保十三年四十一歳の五月文章博士を辞し、八月権中納言になった。時に正三位（公卿補任）。序の署名に龍作（納言の唐名）とあるから八月以降の記であらう。

- (26) 半華室の称はこの書に見えるのみ。

- (27) 『古今集』春上 くらぶ山にてよめる つらゆき

梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける

*筆者が適宜仮名を漢字に変換。

- (28) 国会図書館蔵香道伝書第六十四冊。外題は『古十組伝』

- (29) 目録記載の数。大阪府立中之島図書館と大村史料館は上下巻を別書扱いとしているので正確には四十五書。

- (30) 香道余談』第十一条「源平香……元和帝（注…後水尾天皇）、聖意ありて、名所香にかへて勅作有し」。大枝流芳は『古十組香秘考』で「米川常伯世に出て後、香事一変す。十組香も古の

るのである。またこの書に加えて、江田世恭が収集した忍鎧の香書が都立中央図書館加賀文庫に現存している。忍鎧はその香業が後世に残された幸せな人物といえよう。

(助教授 香道研究)

付記

- (1) 江戸時代の版本・写本の引用には、漢字は正字体・常用字体を原則とし、句読点・濁点を補った。
- (2) 『香会弁要録』『香道余談』等は、一つがきであるが、便宜上これに番号を付した。

注

- (1) 忍鎧の鎧をりっしんべんに書く書がある(角川茶道大事典ほか)が、『十種香暗部山』の版本や後に紹介する忍鎧の弟子編纂の『焚香濫觴輯略』ほかほとんどの書は金偏である。書画のサインには「空華忍子」も見える。「古今墨史蹟鑑定便覧」地下歌人の部。『近世人名録集成』第四卷所収影印。勉誠社、昭和五十一年六月二十日発行。
- (2) 市古貞次等編。平成八年十一月岩波書店発行。
- (3) 伴蒿蹊著。原著寛政十年発行。翻刻正宗敦夫編、昭和四年四月、日本古典全集刊行会発行本による。
- (4) この逸話は、山県篤藏著『芸苑叢話』下卷一九三頁(明治三十年五月吉川半七発行)、『活学叢書』第四編、森彦太郎著「奇僧の片影」一九一頁(文学同志会、明治三十四年五月発行)にも引かれている。
- (5) 森繁夫編、中野莊次補訂。昭和五十九年二月思文閣出版発行三

卷二七四頁。

- (6) 大日本歌書綜覧・群書一覽・古今書画鑑定便覧・奇僧の片影・増訂国書解題・詠寢覚和歌・日本仏家人名辞書・芸苑叢話・校注近世畸人伝続編
- (7) 『謡曲拾葉抄』(二十卷、謡曲の注釈書、寛保元年成る)を加えるべきであろう。この書は、犬井貞恕の編纂で、忍鎧も協力したものであるが、犬井の死後忍鎧が編纂を続け、寛保元年(七十二歳)に脱稿したと忍鎧の序にある。編纂に四十余年かかったという。発行は忍鎧の死後二十年たった明和九年である。版本は原稿の字体を読み誤ったか、空華を直華と記している。『国書総目録』もこれを踏襲し「犬井貞恕編、直華庵忍鎧補」としている。
- (8) 伝記は『妙立和尚行業記』。版本は内閣文庫ほか。
- (9) 天明四年八月村井古巖奉納本である。
- (10) 拙著「香道秘伝書」『川村短期大学研究紀要』第二十号。平成十二年三月発行。
- (11) 当時京都で一家言あつたらしい人物。未詳。部分的な引用文以外著述は現存しない。
- (12) 諸道に通じた大阪の豪商。香は志野流蜂谷宗先の弟子。香の伝書の収集を精力的に行い考察を各書に注記し、考証の著述も多い。彼の注記のある伝書は都立中央図書館加賀文庫に多く残っている。
- (13) こういう文言の入った享保七年の誓約書が現存する。西山松之助著「家元の研究」『西山松之助著作集』第一卷所収。吉川弘文館、昭和五十七年六月発行。四十頁。
- (14) 「蘭奢待記并和歌贈答」(『焚香濫觴輯略』所収)及びほぼ同文の「蘭奢待聞香之記」(『空華香道弁要雜記』所収)は、「年は

8 「蘭奢待聞香の記」「越の小武友梅翁家にて東大寺聞香の興行の日の記」

同前。享保十七年（六十三歳）に行われた香会の記。前者は寛延二年（八十歳）記との識語がある。『焚香濫觴輯略』所収のものは「蘭奢待記并和歌贈答」（草案は蘭奢待焚法説）と名付け同文。記文そのものは香会後のものであろう。後者は『空華香道弁要雜記』所収。小武友梅・風早実積・忍鎧の和歌を記すもの。弁要雜記の識語には共に忍鎧の真跡から写したという。

おわりに

忍鎧が香の道に入った青年時代から壮年時代のころの京都は、「新旧町人の大きな交代期にあたっていた」^{〔注35〕}といわれる。東福門院バブルとでもいうべき時代の終焉は大名貸しの破綻と相俟って、京文化の担い手であった多くの町人の没落を招いた。米川常白を頂点に形成されていた富裕町人層による香の世界もこれと連動することになる。常白の後をついだ玄察の没後香木・香器・香書などが甥の水戸呉服所佐藤久兵衛に譲渡されたのも、忍鎧の香の師実閑齋の香道具が後に四国の大名の所蔵となった（『香道余談』第二十九条）のも、この流れの中のできごとであろう。忍鎧も「香道の友を求しかど

も、共にもてあそばんと云人、一人もなくて久しく過し」
（『香道余談』第二十七条）たという。

これに対し忍鎧が友人の依頼で香会を重ね始めた四十歳代は、京都の新興の富裕町人層が香の世界に関心を持ち始めた時期に当たっているといえよう。ステータスシンボルとして新来の伽羅を手に入れ、高価な香道具を作らせ、それを見せ合う成金趣味の香会も多かった（『香会弁要録』第一条）が、高雅な伝統の香の遊びを理解し楽しみたいと願う人々も多かったはずである。それらの人々にとって伝統の権威を振りかざさず、研究者・教育者タイプの忍鎧は、願ってもない指導者であり、香友であったといえよう。

さまざまな文献を渉猟し、聞き取りを行った忍鎧も、「若年の比、香書にあやまり有を用ひて、改る事を知らず。知人の為に笑ひをとるに、悔む事是にしもかざらず」（『香道余談』第四十条）という。この率直さもまた忍鎧の魅力に思われる。学びて厭わず、教えて倦まず、香会以外では師匠然とせず自然体だった忍鎧が想像される。

『焚香濫觴輯略』には、門下香友それぞれが繁忙な世務の中に香の研究をしていることが記されている。まさに忍鎧の周囲には同好の士が集まっていたのである。その人々が忙中の余暇に編集したのが『焚香濫觴輯略』であり、この書によって忍鎧を中心とする当時の香人の様子を現在に伝えてくれ

さは客によらず香の位によるべきこと（第四十一条）、組香の香木は大きさを揃えること（第四十三条）、「香炉渡らぬ少前に次の人へ斗一札すべし」（第六十三条）など、蘭奢待の諸伝、忍鎧の切り捨てた古法、残した過渡的な作法、今に通じる作法が混在する。

(3) 都立中央図書館加賀文庫六三八八『空華香道弁要雑記』（目録は弁要を翰要と誤記）の前半部に所収の写本。識語はない。

六十一種・百二十種・百八十五種の香名、香木について、香木の五分類、四季等分類、香名の出典を記す。香名出典は後人書込があるらしく、(1)の霞の巻と異同が見られる。

子
文
川
翠

4 『香道余談』(『香会余談』)^(注33)

香道全般にわたる雑録ともいえるべき書。四十四(一書四十五)条の質疑応答の形式をとっている。内容は(3)によりわかりやすくて確かな紹介がされているのでここでは省略。次の三写本がある。

(1) 都立中央図書館加賀文庫六三六九『香道余談』(外題『空華庵香会談余』)。写本。四十四条。人見将恒の識語により延享三年三月下旬(忍鎧七十七歳)以前の著とわかる。

(2) 都立中央図書館加賀文庫六三六五『空華香道余談弁要』の前半部所収の写本。

四十四条。識語は(1)に同じ。

(3) 『古典の精髓』^(注34)所収の神保博行編『香会余談』。四十五条。識語は(1)に同じ。原本は未見だが、(1)(2)より一条多いのは活字化した(三五七頁)の条らしい。

5 細川三斎家臣興津弥五右衛門の香木取得と殉死の記

『香道余談』の追記であろう。二写本がある。

(1) 都立中央図書館加賀文庫六三六九『香道余談』巻末に所収。写本。題名なく延享四年十一月下旬忍鎧(七十八歳)記とするものと無署名のものを併記する。

(2) 都立中央図書館加賀文庫六三六五『空華香道余談弁要』の前半余談の巻末に所収。内容は前に同じ。

6 「香名の論」

都立中央図書館加賀文庫六三八八『空華香道弁要雑記』の弁要の後に所収。香木の名を付けることについての論。人に依頼されて記したものであるという。署名はない。

7 「十炷香短歌」

同前。十炷香の楽しみを長歌で表したものである。署名はない。

2 『香会弁要録』

ある人の「香会の座席用意に古法ある事にや」という質問に答える形式で書き始め、香席に関するさまざまな留意点をあげ、「旧説に愚意の趣をまじへ記し」たもの。

都立中央図書館加賀文庫六四一二の『十種香暗部山』に続けて収録されている写本があるのみ。識語により元文三年四月（忍鏡六十九歳）以前の著作とわかる。後に忍鏡の会の法「空華庵香会定」「別定条々」「香筵古制法」「差定」が収録されている。

全七十三条。一条から五十六条までは、香会挙行にあたっての人選・案内状・出欠の返事・お役の人選・掛物・生花・棚飾り・紙・灯火・乱箱など部屋の準備、当日の記録書法・名乗紙・小記録のこと、香組の心得、香炉の扱い、座位、符聞法・点式法・一柱開き法、お役退席・連衆退席の流れで細かく注意・手順などを記す。五十七条から七十三条は補足事項。最終段階に近い原稿であるが、完成原稿ではなく随時書き継ぎ中のもののように思われる。

3 『香道弁要録』

中級の人を対象とする書。香席中心・番木中心の二部からなっている。次のように独立した二巻本と、二部が別々に書写され他書と合冊して現存するものがある。

(1) 国会図書館の香道伝書第三冊（霧）・第四冊（霞）の写本二冊。第三冊霧の巻は六十五条。第四冊霞の巻は香木関係。識語はない。

霧の巻は、(2) の第五条から第七十条に同じ。香木（蘭奢待・太子）・香炉・灰押図・灰・炭団・炭・銀葉・香盆・火の加減・香炉渡しなど。先行の香書『香道秘伝書』の志野宗信の筆記に準じた内容。ただし作法の理由や手順をわかりやすく記す。主に亭主・香本を念頭に置いたものといえる。

霞の巻は、(2) の第一条から第四条（蘭奢待・紅塵の記）と(3) の香木関係全文（六十一種名香から香木名出典）からなる。

(2) 都立中央図書館加賀文庫六三六五『空華香道余談弁要』（目録は弁要を翰要と誤記）の後半部に所収の写本。人見将恒の書写識語により元文五年三月下旬（忍鏡七十一歳）以前の著とわかる。七十条。第一条の前の朱筆書込に「恵南香道弁要録の中」とある。

(1) の霞の巻にこの書の第一条から第四条、霧の巻に第五条から第七十条と分けて収録されている。享保十三年南都に遊び東大寺の宝物図を写したこと（第三条）、古来の灰の押し様（四季・恋・別など）・香木の置き様は「愚痴なるしわざ」として記さないこと（第二十二条）、香会の書（『香会弁要録』であろう）が先にあったこと（同前）、香木の大き

一遍見侍しに、今世の米川流といふ道具とも大に相違せり」
「已に志野の代なるも、米川の時、改りたる事多し。古代は
万事簡古なりし故、くはしくせざるに有。万の物、後世は
どくはしく成て、改作せし事、是に限べからず」と。つまり
シンプルだった香道具が使い勝手の良さの追求や、手の込んだ
造作など、江戸時代初期から享保にかけてさまざまに改作
が行われていたというのである。そのような時代の中、この
書は、新たに香の世界に入ってきた富裕層にとって、香道具
作製の基準として参考になる有り難い書だったにちがいな
い。またこの書が後々まで書写されたのは、米川流（志野流）
の唯一のまとまった香道具図だったからであろう。

子
文
川
翠

(4) 内容と編纂意図

十種香（十組の組香の意）が最初に出版されたのは、『香
道秘伝書』である。この十組（古十組）は、米川常白の時代
に源平香を名所香にするなど組み替えが行われ、^{（注30）}前述の上巻
④に記した十組となった。しかしたとえば正徳二年八月（一
七一二年）の米川流の香記録を見ると、旧の十組で香会が行
われているように、^{（注31）}元禄前から享保にかけても新古両十組が
行われている。これに対して、元禄十二年四月（一六九九年）
亡くなった忍鎧の師の実閑齋（西村成政）の道具には、「源
平香并当世翫ぶ外組と云物は一品もなかりき」（『香道余談』
第二十九条）だったという。忍鎧はこの姿勢を受け継いだの

であろう。特に後水尾天皇が源平香の代わりに名所香を勅作
されたことを重んじ、源平香は一度もしたことがないという
^{（注32）}（同前十一條）。ともあれ忍鎧が新十組の説明と香道具図を出
版したことにより、従前の十組は古十組としてメインの組香
の座を新十組に完全に譲ることとなったと考えられる。

忍鎧は、『十種香暗部山』の凡例の中で十組の香について、
「格ぞなほり、事すなほにして、この門に入る徳ある事は、
ただこの十種の内にこもれりと知るべし」と、初心者に十組
がふさわしいことを述べている。また図の説明の最後にも、
図解するのは、既に知識のある人を対象とするのではなく、
「心ざし有りていまだ道にたち入らず、且つ遠つ国の境をへ
だててゆかしからん人のこしらへもてあそばむ時のたよりと
もならねかしとおもふのみ」という。つまりこれから香道を
始めようと思う人や、道具類が身近にない土地の人のために
記したというのである。それ故道具についても「新古にかか
はずあつかひよきを本意として図す」という。しかし後の
『香道余談』には、「当世心々に新たに物ずき珍敷拵たるは若
輩初心の人のする事なり。：用て害なくは古雅なる古法にし
たがひたるがよし」（第二十四条）といい、忍鎧の基本的な
見解を示している。

史料館のものがそうである。また香具図(国会図書館)・香之書(名古屋市立鶴舞図書館)という外題もあり、前者は忍鎧の著作とされず、後者は別書とされている。

『十種香暗部山』の長岡恭肅の序文中に「暗部山及び付図」、高辻総長の序文中に「暗部山」、忍鎧の『香会弁要録』第二十四条に「十種香の事。暗部山にくはし」、『香道余談』第十九条「暗部山にしるす」・第二十七条「香道暗部山二巻を述作し」などが見え、序者も忍鎧自身も日常には『十種香暗部山』の名は使っていないなかったらしい。出版に当たって内容を明確にするための命名だったのであろう。『古十組香秘考』(大枝流芳著。延享元年再校^(注28))はもともと多くこの書を引用しているが、「惠南暗部山には」「暗部山曰」「暗部山云」とばかりで、『十種香暗部山』というフルネームの記述はない。同時代人も「暗部山」を通称していたことがわかる。また後の『香道真伝』(関親卿著、安永五年発行)も「洛下空華庵主人くらべ山と名づけ十種香をあらはし」という。後世の解題書『群書一覽』『増訂国書解題』は「香道くらぶ山」を著すと記している(自讃歌管注の注記)。

(3) 版本と写本

現存する『十種香暗部山』は、実見した版本が五部、写本が四十七部^(注29)、この他未整理のため公開されていない写本が二部、あわせて五十四部ある。香書の版本で現存するものでの

もっとも多いのは『香道秘伝書』(改訂版を含む)であるが、写本では本書がずばぬけて多く現存している。

版本の所蔵者は、大阪大学・京都大学・東京芸術大学・東京大学・龍谷大学。いずれも柱に丁づけがあり、序・跋の丁数と本文の丁数をわけている。また上巻本文は「元一」から「元廿九」まで、下巻本文は「付一」から「付十七」となっている。

版は一種ではなく、細かい手直しがあり、最低一度以上の差し替えが行われている。下巻内題「香筵玩具」の左が「半華室蔵版」のもの「空華山人忍鎧図」のもの、香道具図解説の後の「空華庵忍鎧子述」がなく墨筆書入のもの、版刻されているものなどの違いが見える。

写本は、版本を模写したものが多く、利用にあたっては、序跋がない場合でも上記の丁数でそのことが推察できよう。版本を完全に写す写本は四分の一で、序跋のないもの、序跋の一部がないもの、収録順序を変えたものがあり、上巻だけのもの四部、下巻だけのもの目録上十六部。正しくは十四部などさまざまである。この下巻だけのものが多いことが、当時の需要を反映しているといえよう。

当時の道具について『香道余談』第十四条には次のように述べている。「若年の時、志野の火箸・銀葉を見しに、今世にいふとは、各別に違ふ。又米川直の門弟所持せられし道具、

度。三三丁半。

- ④「十炷香」「宇治山香」「小鳥香」「小草香」「競馬香」「矢数香」「名所香」「花月香」「源氏香」「連理香」…十種の組香の解説。二十五丁半。

下卷

題簽「十種香く羅婦山」。内題「香筵玩具」。

- ⑤十種の組香に用いる香道具の図（見開き一丁ごとに次の絵を載せる）。十一丁。

- 子
 - ・十種香箱 同袋 対香炉 香盆 香箸火箸立 同網
 - ・火箸 香匙 灰押 銀夾 羽箒 火味 鶯 符箱 小
- 文
 - 筥 銀台 試銀台
- 川
 - ・符筒 折居 銀葉入 銀葉 炷燼 香外包 試香包
- 翠
 - 本香包

- ・重香筥 火取 記録紙 名乗紙
- ・競馬香盤 競馬香人形（赤方・黒方） 勝負木
- ・矢数香盤 矢数香箭十本 金麿・銀麿
- ・名所香盤 名所香花（桜・紅葉）
- ・源氏香の図（絵入り）
- ⑥右の香道具についての解説二十六条。六丁。
- ⑦跋（無題）。享保十四年九月、半時庵記。三三丁。
- (2) 書名

暗部山という書名について、恭齋の序に忍鎧の言葉として、

紀貫之の詠歌^(注27)によつたこと、童蒙や香道に暗い者を導く意を込めたこと、「くらぶ」の普通で香の品を弁別する比ぶの意を併せたという。

写本の書名は、上巻は版本と同じものが多いが、外題には次のような書名も見える。

香聞様（東京大学）

深緑（国会図書館）

十種香（岡山大学池田家文庫）

香之記（岡山大学池田家文庫）

香之書（宮内庁書陵部）

蝶花集（宮内庁書陵部。大本）

香道暗部山・香道くらぶ山（島原松平文庫・大村史料

館・東京国立博物館）

久羅婦山・暗部山・暗部やま（東京芸術大学脇本文

庫・国会図書館・東京国立博物館・滋賀大学・東北大

学狩野文庫・無窮会神習文庫）

このため『国書総目録』では、暗部山の語を含まない書名の深緑・香之書・十種香を別書として扱っている。また香聞様・香之記は忍鎧の著作と認識されていない。

下巻は、内題から外題も「香筵玩具」とするものが非常に多い。そのため上下巻がばらばらになった時に別書として目録に取られているものもある。大阪府立中之島図書館・大村

庵で香業をついだ門弟のいたことが知られる。

忍鑑の最晩年、忍鑑のもとに集まった人々が編纂したのが『焚香濫觴輯略』である。そしてこの書が成って間もなく忍鑑は亡くなった。宝暦二年十二月十七日夜であった。自宅のある西郊で茶毘にふされたあと、かねて栖願寺の御門主よりいただいていた洛東龍谷（大谷）の地すなわち鳥辺野に墓誌「廟塔碑名」が弟子の手によって建立された（翌年二月五日）。この墓誌は『焚香濫觴輯略』に追加されている。

二 忍鑑の香書

忍鑑著の香書は、『国書総目録』（『古典籍総合目録』を含む）に次の九書があげられている。

空華香道余談併翰要 ×香筵玩具 △香会余談

香道余談 ×香之書 ×十種香

十種香暗部山 ×深緑 ?六種薫物合

右の×印の書は、いずれも『十種香暗部山』の別書名および下巻の題である。また△印の『香会余談』は個人所蔵で未確認だが『香道余談』と原本は同じ。『六種薫物合』は文明十一年の薫物合の記の写本と思われるが所蔵館の整理の都合で閲覧できない。そこで？印以外の書と、『国書総目録』未収録の忍鑑の書について記し、忍鑑の香の世界を概観したいと思う。

1 『十種香暗部山』

忍鑑が最初にまとめた香書。享保五年四月（忍鑑五十一歳）の長岡恭齋の漢文の序のあるもの（注20）がもっとも古い。この序によると、恭齋が散歩の途中忍鑑の庵に立ち寄った時に、近頃纂輯したという暗部山と付図を見せられ序を依頼されたという。この序のある写本は管見では一本であるが、序だけを書いた伝書も存在するから、これ以降求めに応じて披見・書写を許し世に知られ、手直しを加えもし、五年後には百拙元（注22）の漢文の序を得、さらに高辻総長の和文の序を得、半時庵（注24）の跋を得た享保十四年か、その後まもなく出版されたものであろう。完成から十年後のことである。出版は忍鑑の周囲の同好の士の求めと合力によるものであろう。半華室蔵版とあり自費出版であった。

（1）構成

構成内容は、十組の組香の手順を記す上巻と、これに使用する香道具の図と解説を記す下巻からなる。版本の構成と丁数は次の通りである。

上巻

題簽「十種香暗部山」。内題同上。

①序「暗部山叙」。享保十年六月、百拙元養記。漢文三丁。

②序（無題）。年月不記。菅原（高辻）総長記。三丁。

③「凡例」：組香全般の解説十六条。最後の七条は香席法

条)としつつも、作法を厳格に求めて慣れない人が楽しめるような状況にしないよう「優美清和のあそび」(同第三十一条)を心がけ、さまざまなレベルの連衆に対応する細かな配慮がうかがえる。

(エ)「今古当世異説多」(『香会弁要録』第三十八条) ということをもふまえ自説を展開する。米川流を学ぶがとらわれない。

(オ) 古法を大事にするがとらわれない。新古両様あり軽重ない場合は古法をとる。

(カ) 意味のない古法ははっきり排除する。銀葉上に幾筋もの香木を並べることや無理な灰押し方などは取り入れない(『香道弁要録』『香会弁要録』)。

翠 などであるが、全体として言えることは、さまざまな状況を想定しての丁寧な指導、故実研究の成果を生かした主張と同時に道具の変遷等にかかる流動的な部分への柔軟な対応である。

忍鎧は、七十二歳の時、四十余年の歳月をかけた『謡曲拾葉抄』^(注7)二十巻を完成させている。序文に「多くの秘事家々の記録等をよりあつめしらざるハ学者に尋ねとひて以てやうやく首尾せる」という。また翌年七十三歳には、和歌集『自讃歌』の注釈書『自讃歌管注』を完成させている。序文には「古注誤りもあり、省略の事もあれば、初心のまどひすくなく

からず」という。晩年に至るまで倦まず長く続けられた資料探索、丁寧な初心者教導の心は、これらの香道以外の書の編述態度からもうかがうことができる。忍鎧は香道者というより研究者・教育者といえるのではないか。

また忍鎧は「経禪の暇に仏像を彫刻すること数体。其妙手古の弘恵兩祖と雖も多く譲らず」「性、穎雅にして和歌を好み書画を善くす」(「廟塔碑名」原漢文)という多趣味の人であった。和歌は最晩年に至るまで日常普段に詠んだらしく、八十歳になってから友人の勧めで詠んだ『詠寢覚和歌』五十首が現存する。その序には「律師は今八そじにて、よくよみ、よくこのむ心、つゆもおこたらず。まことに今の世にまれなる人なめり」とある。この香道に欠かせない和歌の素養と多方面にわたる趣味も、彼のもとに香に造詣の深い多くの仲間や門弟を引きつけたのであろう。

延享二年春(忍鎧七十六歳)に出版された『改正増補京羽二重大全』^(注17)卷三「諸師諸芸」に十炷香道者としてただ一人「西六条 惠南」と名が掲載されている。享保期の類書が見つけられないのでいつ頃から喧伝されるようになったかは不明だが、これにより忍鎧の知名度と住まいを知ることができ。忍鎧の死後十六年になる明和五年発行の『明和新增京羽二重大全』^(注18)には、十炷香道者として「両替町御池角 藤野専介」^(注19)と「西六条 僧惠南律師門人栖鶴」の名が見え、忍鎧の

翰要と誤記)に収録されている。こちらは「寛延改元のつとめての年巳の初春黄鳥南窓に囀るあした 洛下空華庵忍鎧八十老衲応需書 人見将恒雅士」と識語がある。会から十七年後の依頼に応じたものである。また別に「越の小武友梅家にて東大寺聞香の興行の日の記」も収録され、小武友梅と風早実積卿の贈答和歌も記されている。江田世恭と思われる朱筆注記によれば、両書ともに原書は忍鎧の自筆だったという。忍鎧にとつても記念すべき香会は、後々まで話題となつていたことがうかがえる。

この蘭奢待香会の成功による香道者としての世間的な認知は、周囲の要望とともに忍鎧に香書の筆録を促したのである。彼は『十種香暗部山』に続いて、香会の心得または入門書ともいふべき『香会弁要録』を書きついだ。執筆の年月は特定できないが、唯一現存のものは、都立中央図書館加賀文庫六四一二の『十種香暗部山』の後に収録されており七十三條ある。識語に「香会弁要録者空華庵忍鎧律師のあらはすところ。常に文車に深くひめ置給ふを、年来懇望して漸に求出し卒に書写畢。努々他見可秘々々。空華庵門弟 人見将恒書之 書判 元文戊午青和中浣」とある。元文戊午は三年、青和は四月。忍鎧六十九歳の時である。『香会弁要録』の後には、「空華庵香会定」「別定条々」「香筵古制法」「差定」があるが、これは人見将恒が書き取っていた当時の忍鎧の会の

法であろう。

ついで中級編ともいふべき『香道弁要録』(忍鎧七十一歳三月以前に現存本草稿なる)、番外編ともいふべき『香道余談』(忍鎧七十七歳三月以前に現存本草稿なる)がまとめられた。この翌年七十八歳の十一月には『香道余談』の追記とも考えられる細川三斎の家臣興津弥五右衛門の香木取得と殉死の話を書き記している。

『香会弁要録』から『香道余談』までの内容を見ると、忍鎧が各書に随時補足を重ねつつも、香道全般にわたって記録しようとした意図がうかがわれる。これらの書は、いずれも門弟の人見将恒が忍鎧から借用して書写したことによつて知られるものである。つまりこれらの書写の年記から、忍鎧が門弟の習熟の程度に合わせて順次書写を許可していつて経過を見ることができるのである。

これらの香書からうかがえるのは、

(ア)「近年漸にして香事おこなはる故、故実をしらず、みだり成事おほし」(『香会弁要録』第二十一条)という香道の状況。

(イ)他書に見えないさまざまな状況に対応する指導が見られる。特に『香会弁要録』。

(ウ)「連衆、威儀をただし、意をしずめ、礼をあつく、和をもちらとして、いささかも勝他の心有べからず」(同第十九

ではなく、香の趣味人とし、集う人々も、忍鎧と師弟関係という認識がなく、たとえば香の研究グループというような気分ではなかったかと察せられる。特に香会を挙行しはじめた初期のころは、そうだったのであろう。これは、「いったん師についたうえは他流は習わない」「習ったことは許可なく子供にも相弟子にももらさない」「書記したものは他にみせない」などという誓約書を取り交わす一般の師弟関係とは全く異なったものである。

跋文には、その香会の様子を、「昔今の匂ひをとりならべ、一くさ二くさ打あはせて絶えずいとなむものへだてなく興ある事を得るなん」という。つまり香合をよく行っていること、師弟・身分などの隔てなく楽しんでいることが記されている。香木を所持した富裕町人層の中で、茶道・香道と趣味を広めた人々が、趣味人かつ研究者タイプの忍鎧と接し、香の故事を聞き、名香を品評しあい、互いを高めあった会だったのであろう。忍鎧は、「中年過までは、八種七種に、折々十聞けれども、四十才以後、肺そこね、後には曾て聞かずなりぬ」(『香道余談』第二十八条)というから、富嶋らと香会を行なった頃は、香を聞くより香の資料を渉猟し、若年の体験や伝書の知識を伝えることの方により積極的になっていたのではないか。

『十種香暗部山』は、執筆から約十年あたためられたあと、

恐らく香友・門下の尽力により享保十四年九月の跋文以降もなく公刊されたと思われる。忍鎧の香道者としての名は、この公刊によってグループの外に広まることになった。

それから二、三年後の享保十七年二月十四日(六十三歳)、香の門弟となっていた(『香道余談』三十条)越前の小武友梅(八十有余歳)の依頼によって、友梅所持の蘭奢待を聞く会を催し、指導と香本を勤めている(『香道余談』第三条・「蘭奢待記」)。通常の香会とは異なる最上の名香にふさわしい香会は、「昔、東山殿、香合の宴会有りてより爾来未だ盛筵のかくのごときと有るを聞かず。これ後世の龜鑑たるべし」(『焚香濫觴輯略』所収「蘭奢待焚法説」。原漢文)という会となった。小武氏と縁のあった風早実積卿(注15)の臨席、実積卿と忍鎧の和歌の贈答によって、香道の世界における忍鎧の地位は確かなものになったといえよう。なおこの会には、床

の間に忍鎧の描いた大軸の寿老人像が掛けられていた。香会の掛軸は、「書画ともに香によせある物はいよいよ然るべし。さなくば仏仙の像、花鳥禽獸云々」(『香会弁要録』第六条)に従ったものであり、友梅の忍鎧への敬意でもあったろう。

この香会の記録は、『焚香濫觴輯略』に漢文の「蘭奢待説」「蘭奢待焚法説」(前者が下案か。ほぼ同文)と和文の「蘭奢待記并和歌贈答」がある。この和文とほぼ同文のものが都立中央図書館加賀文庫の『空華香道弁要雜記』(目録は弁要を

師弟の間柄でなかったことは、波線の文言で推測されよう。

しかし『香道余談』第二十九条で実閑齋の香道具を細かに紹介し「若年の時、手にふれし故……七十余年にもわすれがたく、目にうかぶ」といい、様々の仕様の道具を見たことから、「今新に拵人は、古人の風流を学び広く吟味にわたり造て可然事なり」と柔軟な工夫を認めていることは、実閑齋が真の意味で忍鎧の師であったといつてよい。

忍鎧の香道は、いずれも米川常白の警咳に接した中川親光・西村成政（実閑齋）・荻寿仙の香席への列席・香談の間に知識を蓄積し、さらに「志野の古書」（『香道余談』第十六条）を涉猟し、作法・道具の変遷を知った上で、新古を取捨選択し忍鎧流を構築したといえよう。

忍鎧が実閑齋から初めて香道を学んだころ（二十歳代の元禄時代）、「香道の友を求しかども、共にあそばんと云人、一人もなくて久しく過し」、のち隠者になってから（四十歳代か）、「万事打捨けれども、本願寺殿の家士富嶋武治と云人、若年より知己の友にて、常に草庵をとぶらひ、香道の事を強て所望せしかば、雪の折、雨の日などに、旧情わすれがたく、こころにもあらで漸□輩寄て興行し、其後人の所望によって香道暗部山（『十種香暗部山』のこと）二巻を述作して後、弥々広成ぬ」（『香道余談』第二十七条）という。

『十種香暗部山』は後述するように、最初の長岡恭齋の序

文から享保五年（五十一歳）には完成していたことがわかる。

この年には、寛文九年出版の『香道秘伝書』が五十年ぶりに再版されている。この書は、江戸時代以前の伝書と十組香を収録するものである。^(注10)このことは当時こういう古書の再販が利益を上げられるだけの需要が出てきたということ、同時にこれ以外に見るべき出版物がなかったということを示している。そこに『十種香暗部山』執筆・出版のニーズを見出だすことができる。大枝流芳が立て続けに香書（図表の『香道秋の光』から『東山御香合』まで）を出すのは、この後享保末年以降のことである。

富嶋の依頼がきっかけで始まった香会に参集した人々は、享保十四年（忍鎧六十歳）の『十種香暗部山』の半時庵の跋^(注11)文によれば、「茅廬の尊阿闍梨隣有る事年以て久し」（忍鎧の香道に対する志に共鳴する人々が、草庵を訪れるようになって久しいの意）とし、「香道を伝ふるもの北蘭州・仲恭古および杉楓川が徒なり」という。都立中央図書館蔵加賀文庫本同書には、三人に「北尾芳庵医家」「仲尾壱岐画師」「島原」と朱筆書込^(注12)（江田世恭筆か）がある。香道家としての忍鎧についての、志ある人という程度の言及は、半時庵に跋文を依頼に行った上記三人の関係者の認識でもあったのである。う。仮名序にも跋文にも、忍鎧が隠遁生活で門を閉ざしていると強調しているから、忍鎧を香道をもって門戸を開いている人

て)・肖柏伝・道三香譜伝・隆勝伝・宗拾伝・付録(宗拾挿話)・芳長老伝・光悦伝・紹鴎伝・居士伝(千利休)・居士両男伝・付録(香道について)・細川氏求香伝・光右子伝(烏丸光広)・一任伝(米川常白)・親長親光伝(中川氏)・成政伝(西村氏)・寿仙伝(荻氏)・江翁伝(入江氏)・直方伝(西村氏)・無題(愚按:香道系譜)・無題(当時:次項の下書き)・宗匠伝(忍鎧伝。宝暦二年二月矩美書)

C 蘭奢待説・蘭奢待焚法説(前説と同文)・蘭奢待記並和歌贈答(和文。空華隱士誌)

D 洛東龍谷空華律師廟塔縁起(和文)・洛東龍谷山忍鎧恵

南律詩廟塔碑名(宝暦三年二月五日浄潭書)

翠 川 文 子 E 元養老和尚伝・則政伝(奥村氏。宝暦三年秋没)・幸知

伝(衣川氏。宝暦三年四月没)

この書はAの序文によれば、忍鎧の下に集う香友同志が、香史編纂を企図し、諸家の記録や忍鎧からの伝聞をもとに作成したものである。Aで上代から中古にいたる香と薫物を概観し、Bで翫香の歴史を京極道誉から師の忍鎧に至る人物伝を通して見ようとしている。宝暦二年三月に一応の完成をみたが、この年末に忍鎧が亡くなったので、忍鎧の蘭奢待記文C、忍鎧の小伝の碑文D、香友の伝Eを書き継いだものである。

この書では、忍鎧の話をもとに香の系譜を次のように示している(一部姓などを加筆した)。

志野宗信……↓建部隆勝近州上。号留守齋↓芳長老相国奉天禪寺塔堂号東松軒↓米川常白任齋。香道中興祖↓中川親長助之丞↓中川親光忠兵衛
↓西村成政実閑齋↓荻寿仙松洞庵
——— 惠南忍鎧。姓菅原号空華宗天台香道中興師範

系譜で忍鎧の師とする西村成政(実閑齋)について、忍鎧の著の『香道余談』によれば、元禄十二年四月二十日六十三歳で亡くなったという。この年忍鎧は三十歳。実閑齋についていたのは二十歳代ということになる。実閑齋について同書に、「予(忍鎧)若年より馴むつれて、種々故実を語られける。十炷香に、極て八種よりすくなき聞はなし。大方は十聞なりき」とある。また寿仙は、同書に「茶香有職針医を業とせし人也。正徳二辰十二月廿七日終る」という。忍鎧四十三歳の時である。『焚香濫觴輯略』の伝には、「(寿仙は)一任齋常白老翁に随ひ、志野氏末流を汲む」(原漢文)とあり、また「予、若年の時、常白高弟親光、同高弟成政、同高弟荻寿仙、是等皆面会せし人々なり。殊に成政、寿仙は、年来むつまじくまじはり、香をも聞、朝夕香談せし人なり(『香道余談』第十六条)」とあり、系譜の表記と相違が見られる。実閑齋と忍鎧の関係は、一般的に想像される誓約で結ばれた

『続近世畸人伝』によって「八十有余歳」で亡くなり鳥辺山に葬られたことを確認できただけで、森の基づいた資料は明らかにできなかった。以下はこれらの資料以外による忍鎧の生涯と著作である。

一 忍鎧について

忍鎧の伝記資料に使えるのは、『十種香暗部山』の享保五年の長岡恭斎の題辞（東京大学蔵『香聞様』と早稲田大学蔵『志野流香道伝書』にある）と神宮文庫蔵『焚香濫觴輯略』とである。

誕生は『焚香濫觴輯略』所収の「洛東竜谷山忍鎧惠南律師廟塔碑名」（宝暦三年建立。以下「廟塔碑名」と記す）に寛文十庚戌年臘月除夕、つまり十二月三十日という。霊元天皇・四代將軍家綱の時、後水尾院・東福門院・米川常白の最晩年に当たっている。

長岡恭斎の題辞には、忍鎧について「師、もと城州の産。而して名は忍鎧、号は惠南。乃ち父前田久友の二男なり。その先累世本願寺の家臣。…兄国任仕へて、その職を襲す。師…十又九歳、甫めて天台律門に入る。今既に半百一を踰え、弥々清規嚴密なり。矧んや亦書法・書図・詠歌・聞香悉くその式を得たり」という（『志野流香道伝書』所収題辞。原漢文）。『焚香濫觴輯略』には「姓菅原」というが、これは前田

氏が菅原姓だからである。

忍鎧が十九歳（元禄元年）で天台律門に入ったことは、先の「廟塔碑名」にも触れており、天台妙立阿闍梨の室に入り剃髪したという。妙立阿闍梨（慈山）は初め禪宗ついで天台宗に移り小乗律をもつて厳しく身を律し精力的に活動した僧^{（注8）}号を唯忍子というので、忍鎧の名も師の号の一字をもらったものである。忍鎧が入門した元禄元年当時、妙立は東山の草庵を拠点として活動していたが、元禄三年正月母の死の後まもなく病臥し七月三日五十四歳で亡くなっている。忍鎧が警咳に接したのは実質二年位ということになる。その後の忍鎧の師については不明である。

『焚香濫觴輯略』によれば、忍鎧の香道の師は西村実閑齋という。

『焚香濫觴輯略』^{（注9）}は、神宮文庫蔵のものが草稿本かと思われる孤本で、内容は次の通りである。

A 序詞（和文）

宝暦二年春、烏有子書

叙（漢文。以下同じ） 宝暦二年三月、二樂齋書

焚香濫觴輯略序 宝暦二年三月、百花齋書

付録（補足）

B 道誓伝・勾当内侍伝・真能伝・珠光伝・珠報伝・真相伝・三条西家三卿伝（実隆・公条・実澄）・宗信伝・宗祇伝・從関東宗祇之状（和文）・愚按（宗祇状につい

はじめに

江戸時代出版された香道の書のうち、その写本を含めた現存部数の最も多いのが『十種香暗部山』である(下図参照)。そしてその著者が忍鎧^(注1)である。この稿は、忍鎧の生涯と、『十種香暗部山』その他の香書について、新資料と写本調査の成果をもとに明らかにしようとするものである。

忍鎧についての最新かつ充実した情報は『国書人名辞典』^(注2)のもので次のように記されている。

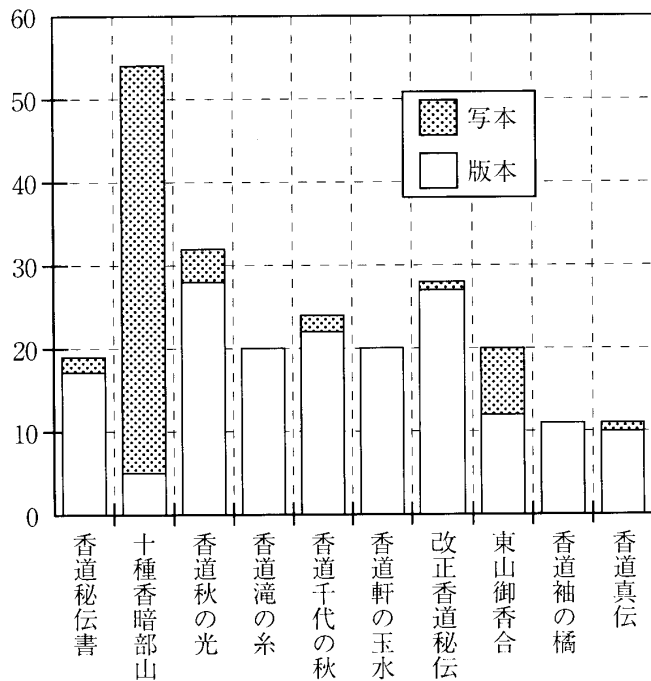
翠川文子
忍鎧 ^(注1)にんがい 僧侶・香道家「生没」寛文十年(一六七〇)、宝暦二年(一七五二)十二月十七日没。八十三歳。「名号」法諱、忍鎧。字、惠南。号、空華子・空華庵。「経歴」京都の人。和歌を風早実積に学び、香道に長じた。

〔著作〕詠寝覚和歌 空華香道余談併翰要 香会余談 香筵玩具(享保十四) 香道余談 香之書 自讃歌管註(寛保二) 十種香 十種香暗部山(享保十) 深緑 ○六種 薰物合

〔参考〕名家伝記資料集成 大日本歌書綜覧 続近世畸人伝 角川茶道大事典

これを補うのは『続近世畸人伝』^(注3)で、次のようにいう。

聞香に長じ一時に鳴る。連理焼合せ五味七国をきき知るのみならず、凡そ物の臭気をきくこと常ならず。(このあと



江戸時代出版香書とその写本現存部数
(十部以上現存のもの・左から出版年順)

雪の匂いから降った場所を当てたこと、紅塵という名香を捜し出した逸話を紹介する^(注4)。此の僧、画もよくて風韻あり。和歌をも好みし人なり。…寿八十有余にて没し、鳥辺山に収む。

忍鎧(惠南)の生没年について初めて言及したのは森繁夫の『名家伝記資料集成』^(注5)である。しかし森が資料としてあげた八書^(注6)には、その記述がなく、八書の中の『群書一覽』(巻五、一〇七丁)に載せる『謡曲拾葉抄』の忍鎧の序文に寛保元年七十二歳とあることから、寛文十年生まれであること、

忍鎧とその著述

翠川文子

キーワード 忍鎧 香道 十種香暗部山

要旨

江戸時代もつとも書写された『十種香暗部山』の著者空華庵忍鎧（恵南）の生涯と著作を初めて紹介する。忍鎧の香業は『焚香濫觴輯略』と著作によってほぼ知ることができる。

〔寛文十年十二月三十日誕生（前田久友の二男。兄は国任）、元禄元年（十七歳）天台宗妙立阿闍梨に入門、同三年七月阿闍梨死去、二十歳代西村成政（実閑斎）から香を学ぶ、寿仙など香友と交わる、三十歳代犬井貞恕と『謡曲拾葉抄』編纂を始め膨大な資料を渉猟し七十二歳に至って完成、四十歳代隠棲（西六条）、友人の依頼により香会を重ねる、享保五年四月（五十一歳）『十種香暗部山』草稿完成、享保十四年九月以降（六十歳）『十種香暗部山』出版し香名広まる、享保十七年二月十四日（六十三歳）蘭奢待香会の香本を勤め香者としての地位確立、元文三年四月（六十九歳）以前『香会弁要録』執筆、元文五年三月（七十一歳）以前『香道弁要録』

執筆、七十三歳『自讃歌管注』完成、延享三年三月（七十七歳）以前『香道余談』（『香会余談』）執筆、八十歳「詠寝覚和歌」五十首を詠む、宝暦二年十二月十七日（八十三歳）死去、鳥辺山に葬られる。著述はいずれも現存」

忍鎧が香会を重ね始めた四十歳代は、京都の新興の富裕町人層が香の世界に関心を持ち始めた時期に当たっていた。伝統の権威を振りかざさない香の研究者・教育者としての忍鎧の立場は、高雅な伝統の香の遊びを理解し楽しみたいと願う人々を引き寄せ、その集まりの中から『十種香暗部山』が生まれ、さらに蓄積された知識と見識が書きつがれ現存している。香書からは、さまざまな状況を想定しての丁寧な指導、故実研究の成果を生かした主張と同時に道具の変遷等にかかる流動的な部分への柔軟な対応、形と心を重んじつつもさまざまなレベルの連衆の楽しめる香会を第一としたことがうかがえる。